

つて来る風采は餘り好い圖では無く、其當時から人氣の悪い先生であつた。

◎解剖學と、西洋考古學で毎年生徒が閉口して居るのは久米先生の講義と試験で、普通の講義の時には牛の涎の様にだらだらで、面白くもをかしくもなく、二時間の間鐘の鳴るまでやるので困つた。然し此解剖と考古學は私共到大變役に立つので、今更ながら有難く思つて居る。先生の身になつて考へて見ると、如斯學術的な事は別に面白くやり様の無く、只詰込主義の物らしいが、其時間には彼所の隅でも此所の方でも居睡や欠伸が始まるのであつた。そして久米先生の試験振りが變つて居た。第一講義室の略圖が出来て居て、一々丁寧な君は何處へ着けと差圖して着席させ、そして表に姓名を記入するので三四十分もかゝつて先づやつと席が定まるのだ、序に云ふが岩村先生のは勝手に着席させて置いて、自分は教壇の上で椅子に腰を掛け、そしてポケットから大きな黒眼鏡を取り出して、兩脚を百五十度位な角度にふん張つてカンニングを防禦する様は仲々先生隅に置けぬと思つた。其結果はどうかと云ふと、久米先生の採點は辛ひ／＼満點と思ふた奴がやつと八十點か八十二三點で、岩村先生のは九十點九十五點は取れる、關先生のは毎年百點を取る者が一人や二人は有つた。そんな所からも關先生は生徒間の評判が頗るよかつた。

◎美術教育の爲に諸先生に云ひたいのは、何も學者を育てる學校じやなし、又如何に諸先生の様に學術がよく出來たとて、美術家の方から見たら、生た字引か、飯を喰ふ書物位にしか思ふて居ないので、要は學術の豪い人でも技術者としては何の役にも立たない、只必須科目としては結構だが餘り八ヶ間敷く試験をしない

で、必要な事を能く分る様に注意深く教授されたら、本科生の負擔が軽くなり學術を餘り勉強する必要も無く、充分に技術を練磨する事が出来るだらうと思ふ。卑近な例を掲げて見ても、洋畫、彫刻科を出た人々で相當な成績を擧げて居る人に、本科で學術の優れて居た人が幾人あるか勘定して貰ひたい。其多くは學校の撰科を出たか、稀れには片輪な研究所にて育つた人々の方が名作を多く出して居るではないか。無遠慮に、竿頭一步を進めて云へば、先生あなた文學術が出来た所で美術家として何に成りますか、と申上度なる。

⑥ 『東京美術学校校友会月報』創刊

校友会機関誌『校友会雜誌』は明治三十四年八月五日発行の第五号以後廃刊となり、本年六月二十一日、新たに『東京美術学校校友会月報』第一号が発行され、昭和七年十二月十五日発行の第三十一卷第六号まで発行が続けられた。左記は創刊号に掲載された正木直彦校長の發刊の辞である。

月報の發刊に就きて

正木 直彦

校下三百の少壯美術家各志す所に隨て其の師門を異にし其教室を別にするか故に五年間の長日月朝夕同じき校門を出入し同じき食卓に就きながら終に道途の人にして了るの奇觀あるを免れず。かくの如く個々に孤立する事は技藝を修練する上にも道義を切削する上にも其の不利不便宜ふ可からざるものあり。是に於て校友会

を起し或は柔道擊劍庭球弓術に或は遠足旅行に或は書を讀み文を講ずる事に依て或は名士に益を請ふ事に依て常に親睦融會するの機會を造りつゝあり。校友會は之を以て猶足れりとせず雜誌を發行し其の事項を記録して同人の間に頒てり。是れ親睦融會の樂みを永遠にするの方便なり。今や春秋二回の發刊を改めて月刊とするの目論見を立てたるは彌其効能を大にして校友會の實績を擧げんと欲するに外ならず。而して立派に見ゆる目論見は兎角龍頭蛇尾に傾き易し。是に於て月報の永續の爲に一言せざるを得ず。

月報掲載の事項は種々雑多なり。學校記事即ち教務庶務の雜事職員の動靜は巨細洩れなく報道せんと欲す。以て日誌とも見るべく年月を経ては詳密の歴史として残るべし。美術界彙報。是れ亦我が同人か將來翔翔せんとする舞臺の記事最も詳密を要す。海外美術界彙報。今や内外の美術相影響するの事實あり最も迅速に海外の出來事を知るにあらざれば人後に墮るの謗あるべし。新刊美術書の内容を知りて之を取捨するは修養上に缺く可からざる事なり。學問の修養を勉めずして技巧の末にのみ齷齪するは職工の事なり。我が同人皆美術家を以て任ずるもの讀書を以て日課の半を費さざる可からず。月報は此項に於て力を致さん事を期す。教室雜俎に於ては教室の瑣事逸聞を拾收せんとす。事繁瑣逸興に涉るはと其の味津々たるものあるべし。將來大美術家此中より輩出するものあらば後世の史家必ず教室雜俎中より多くの史料を拾ふ事なるべし。卒業生の動靜は在校學生の最も知らんと欲する所なるべし。凡そ世の中に事業を成さんとする者は孤立にては甲斐なき事なり。後進は先輩の推輓に依て其の志を達すべく先輩は後進の扶

掖に依て其の大を成すべし。而してかくの如き關係は互に相知るに因縁せざるべからず。是に於て卒業生諸子に望むに月報に依て故郷の現状を知り如何なる後繼者の其の中に活動せるかを知悉せられん事を以てせざるを得ず。以上は重なる事項なり。美術界の活動益旺なるに隨て掲載すべき事も益増加すべし、月報は續て面白きと有益なるとに依て其効果を益すべく又以て其の永續を保障し得べし。而して月報を讀て面白く且有益ならしむるは何人の負ふべき責任なるか。校友會同人共同の責任なり。即ち讀者はやがて記者なるか故に讀て面白く且有益ならんことを欲せば各自に面白く有益なる資料を供給すべし。是れ即ち繁榮の途なり。永續の策なり。

正木が「年月を経ては詳密の歴史として残るべし。」と記しているように、本誌は今日掛替えない東京美術学校記録資料としての価値をもつものとなっている。編集、發行に中心的役割を果たしたのは屋代鉞三（明治二年～大正九年）で、彼は明治二十三年に本校寫字生となり、同三十一年に書記となり、本年五月に至って本誌編集主任を囑託され、以後大正五年十二月までは本校庶務掛、教務掛等を勤めながら本誌發行に力を注いだ。ほかに日置流竹林派本多利実の許可を受けて本校の弓術指南をつとめ、また、文展、帝展の書記をもつとめている。

⑦ 『美術新報』創刊と岩村透

『東京美術学校校友会月報』が創刊された年の三月には『美術新報』が創刊され、最有力美術雑誌となった。岩村透は同誌の發行に